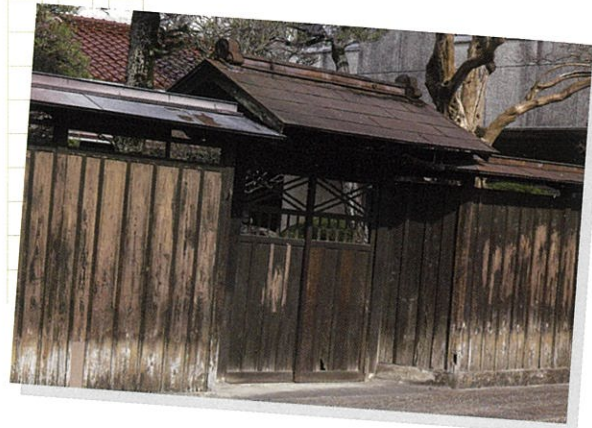




絹で築いていた川俣を支えていた
「川俣銀行」の当時の姿。

大きな銀行が目に入る。
今は名前も違っているが、

古関が銀行員として働いていた
川俣銀行の現在の姿である。



高校を卒業後、音楽浪人をしていた古関は
「家でブラブラしているなら、行員が不足しているので
銀行に勤めないか」と川俣銀行の頭取をしていた
伯父に声をかけられ、銀行に就職したという。
間もなくイギリスの作曲コンクールで入選し、
人生は古関の望むものとなったのだが。

銀行から10分ほど歩けば、
古関が住んでいた場所に着く。
母親の実家であり、家屋は建て替えられているが、
当時の大きな塀が今も残っている。
黒ずんだ木板の一枚一枚が
過ぎた時代の長さを物語る。
ここで偉大な作曲家が暮らしていたのか。
感慨深いものがある。



古関が作曲した
「川俣町民の歌」の歌碑。

お土産用に買っておこう。
きっと、あの人も
好きな味だ。



古関の下宿のほど近くに
創業明治20年という
老舗の菓子店を見つけた。
無類の甘いものの好きだった古関もここで
菓子を買って求めているのかもしれない。
将棋や囲碁の盤にも使われる
「かや」の木の实を使った
珍しいあめを買って食べてみた。
大粒のあめから優しい甘みが
口いっぱいひろがる。
なんだか妙にクセになりそうな、
懐かしい味がする。

古関が弾いていたオルガンを見に行く。
オルガンは100年以上の年月に磨かれた
渋い光を放っていた。
当時としては、
非常に高価なものだったというが、
よく見ると、銀座の楽器店で
製造されたと記されている。
古関は青春の燃えるような情熱を
このオルガンにぶつけたのであろう。
鍵盤の隙間からそのころの
音が聞こえてきそうである。



実際に古関が使っていた
オルガンが現存し、
当時の音色を
聴くことができる。

※古関が使用したオルガンは、
町なかの呉服店に展示されている。
詳しくは町役場に問い合わせを
川俣町役場産業課商工交流係
Tel.024-566-2111

驚いた！
川俣シャモとは
こんなに美味しいものなのか。



今回の旅の楽しみのひとつが
川俣町の名物、シャモ料理だ。
あらかじめネットで調べておいた店は
問題なく見つかった。
珍しいシャモの親子丼を頼む。
引き締まった肉は適度な弾力があり、
味がしっかりしている。
うま味がつまみと言わなければならない。
これはいつもの親子丼と
一味も二味も違うぞ。



道の駅川俣「からりこ館」で、
体験できる機織り。
「絹の町」を感じられる
歴史が展示されている。



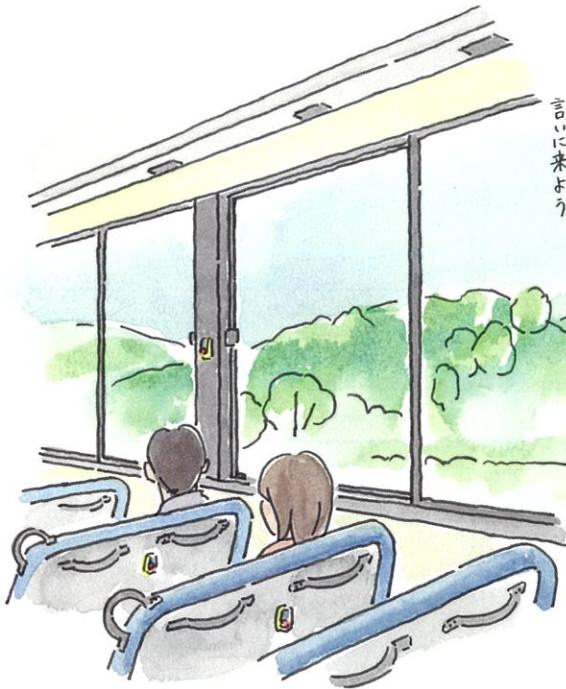
手はどきどきしてくる
笑顔が素敵な
菅野さん。



川俣町では、年に一度
シャモ料理の大きなイベントがあり、
秋には全国から人が押し寄せる
国内で最大級の中南米音楽祭
「コスキン・エン・ハポン」が開かれる。
冬には田んぼのスケートリンクも登場するという。
道の駅川俣「からりこ館」では
機織り体験もできるといふし、
またここで古関裕而の面影を感じながら、
ゆつくりと時間を過ごしてみたい。

福島駅に戻るバスは、
夕方からだと1時間に1〜2本。
さてさて、のんびり帰るとしよう。

ゆったりとした旅だった。
次は「たいま」と
言いに来よう。



(文)川俣を巡る編集部・H